ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「えっ？　じゃあ、ロランは今回は待機ってことですかっ？」

　あれから三十分後。学校から帰宅した詠に、今回の任務のことを話すと、何よりも先に俺が自宅で待機することについて驚きの声を上げた。

「まあ、俺も驚いたけどさ。でもよく考えてみると、それも当たり前かなって……」

　そう呟いた俺は、自分の部屋の方に目を向ける。本来なら部屋の壁に掛けられているはずの二本の刀は、今もマルクスさんに没収されているままだった。これでは俺は戦力にはならない。

　三人もそれを分かっているようなのだが、それでも複雑そうな顔をしていた。

「……やっぱり、私、マルクスさんのところに行って、ロランの刀を返してもらうように説得してくる」

「いや、いいって。そんなことして返してもらったところで、俺の出動は許可されないだろう？」

「う……」

　この樹葉とのやりとりも、これでもう五回目だ。たった三十分でこれである。

　気持ちは嬉しいのだが、俺が刀を没収された理由を理解していない以上、返してもらえるとは到底思えない。仮に返してもらったとしても、今の俺では、多分あの刀は振れない気がする。

　なんだかんだ言って、結局そのことについて考えるのを後回しにしてしまった。今更後悔したところで全く意味は無いのだが、それでも後悔の念は残ってしまう。

　人知れず溜息を吐く俺。一応、木藤さんがいるものの、護衛が三人では少し心許ないのではなかろうか。まあ、今の俺が加わったところで大した戦力にはならないかもしれないが、それでもいないよりマシな気も……それならやはり、今だけでも刀を返してもらうべきか？

　いや、それは違うか。

　一人でそう結論づけた俺は、頭を横に振る。幸い、その動作に気がついた者はおらず、誰かに不審がられることもなかった。気まずい静寂が部屋中に充満しており、樹葉のさっきの発言以降、口を開く者はいない。皆、それぞれ考えることで手一杯のようだ。

　こういう時、レイが何か言ってくれると、多少なりとも雰囲気が変わりそうなものなのだが、肝心の彼女は、今この部屋で一番難しそうな顔で、口元に手の甲を当てていた。

　それが、俺が任務に参加できない事について考えているのか、それとも三人で任務に当たらなければならない事について頭を悩ませているのか、はたまた別の理由……そもそもこんな時にトラブレから会談を持ちかけられた理由について考えているのかは分からない。一番最初なら、個人的にはとても嬉しい。まあ大方、三人での任務について、どのように動くべきかを考えているのだろうけども。こんなんでも、俺たちのリーダーだからな。

　ここまでの発言的に、樹葉が黙ってうつむいているのは、俺が任務に参加できないことについて考えているからだろう。嬉しいのだが、取り敢えず今は目先に迫った任務に集中してもらいたい。

　そう言えば樹葉は俺の事になると、結構真剣に悩んでくれるよな。俺が家出した時も、この四人の中だと一番最初に叱ってくれたのは樹葉だったし。

自惚れとかそんなんじゃ無いが――これで間違っていたら相当恥ずかしいし申し訳ないんだが――樹葉って、俺を『身内』としてカウントしてくれている。俺たち以外にはあまり叱ったりしないからだ。何というか『身内』と『他人』をしっかり区別している、とでも言うのだろうか。

ここら辺は人にもよるのだろうが、俺はちゃんと叱ってくれる人については好意的に思っている。昔テレビで、「叱ってくれる人は、その人を本当に大切に思っているからだ」みたいな話を聞いてから、そう思うようになったのだ。いや、マルクスさんの時は反発しちゃったけど……まあ、そこは『理屈と感情は違う』ということで。

「…………」

　何か、樹葉について色々考えていたら、少しむず痒くなった。変なことを考えるのはやめよう。

　そう言えば、詠はあれだ。俺が任務に出られないと聞いた時のあの一声から、何も言葉を発さなくなってしまったな。

　そう言えば、同じ男だけど、詠が一番何を考えているのか分かるようで分からない。俺のことは好意的に見てくれているのかもしれないが、それだけだ。レイはリーダーだから、樹葉は言葉や行動に出るから、ということで、ちょっと注意すれば割と分かるような気がするのだが……今、黙り込んでいる詠が何を考えているのか、俺は全く分からなかった。

　もっと早くから打ち解ける努力をしていれば、もっと違ったのだろうか？

　そんなことを考えていたら、ベルが鳴った。

『トラース』へはこの部屋から行くことになっているから、きっとお姉様だ。

　案の定、玄関の扉を開けると、車椅子に乗ったお姉様と、その後ろで補助をしている木藤さんの姿があった。

　お姉様は、出迎えた俺の声を聞いてもお礼を言うだけで、他には何も言わない。木藤さんも、こちらを一瞥してきただけだった。

　……そう言えば、木藤さんってあまり喋らないよな？　俺と話したのって、初めて会った時に少し言葉を交わしたのが最後だったっけ？

「遅くなてしまってごめんなさい」

「あっ、いえっ！　私らもバタバタしてたんで、かえって丁度良かったと言いますかっ！」

　リビングに来るや否や、お姉様はそう言って頭を下げる。レイの声が珍しく上擦っていて、何だかこっちが恥ずかしい。

　ほら、お姉様もクスクス笑っていらっしゃるぞ……あ、今樹葉の手がレイの口を塞いだ。樹葉ＧＪ。てかレイはまだ何か言うつもりだったのか……。俺は、この光景を見ても眉一つピクリとも動かさない木藤さんが怖くて仕方がない。後で説教されたら、お前のせいだからな……はぁ。

「あの」

　そんな中、詠がお姉様に話しかける。

　すると、今までレイの口を押さえていた樹葉の動きもピタリと止まった。

「お――」

「やっぱり、ロランを連れて行くことはできませんか？」

　俺が「どうした？」と聞く前に、詠がとんでもないことを聞きやがった。

「お、おいっ？　ちょっと待……むぐぅ」

　それ以上は何も言わせまいとした俺だが、そんな俺の口を樹葉が塞ぐ。いつの間にかレイは解放していた。

　いや、それよりも。

　上が一度決めた決定を、下っ端があれこれ言うのは色々と問題がある。下手をすれば何らかのペナルティが出ることも普通だ。それを、詠も分かっていないはずがない。それに、俺の口を塞いでいる樹葉も、黙って何も言わずに成り行きを見守っているレイも、そこら辺は分かっているはずだ。

　正直、俺がどうこうよりも、この三人の方が心配だ。

　心臓をバクバクさせながら、それでも少し不謹慎だが……俺は少し期待した眼差しでお姉様を見る。

　だが、その期待はすぐに裏切られた。

「……あの、お姉様。その、今回だけでも謹慎を取り下げてはもらえませんか？」

　残念そうな顔をしつつも首を横に振ったお姉様に、レイが今度はちゃんとした声で食い下がる。

「私としても心苦しいのですが……」

「で、でもっ――」

「樹葉さん」

　空恐ろしくも大きな声を出してレイに続く樹葉を、お姉様は――これが『チーム』のトップに君臨する者とそうでない者の『格の違い』というものなのだろうか――決して声を荒げることなく優しい口調でそれを遮った。

「気持ちは分かりますが、ロランは……ここ暫く、刀を振るっていないのですよ？　マルクスからそう聞いています。そんな状態で戦場に出すのは、『ワルキューレ』のリーダーとして見過ごせません」

『うっ……』と、この場の誰もがそう思った。

　まさに正論。確かにこのところ、俺がやっているのはせいぜいランニング程度。何となく地下の格技場へは行きづらくて、木刀すら振っていない。

　寝ていた時間も考えると、あれから一週間近く経っている。流石に完全に腕が鈍った、ということはないだろうが、ぶっつけ本番というのは少々無謀だ。俺個人の感覚では「全然大丈夫です」と言うところなのだが……第三者で、しかも経験豊富な方々からすれば、確かに間違いなく止めにくるだろう。

　……と、頭では分かっているのだが。

　やはりと言うべきか、じゃあ納得できるのか、と聞かれれば首を横に振ることになる。さっきも言ったが、『俺個人の感覚』では『全然問題ない』のである。

すると、ここまで黙っていた木藤さんが冷たくそう言い放った。

「……君たち、これは上の決定です」

「ちょっ……むぐぅ」

　カチンときたのか、樹葉が文句を言おうと口を開く。その際に少し俺への力が緩んだ隙を見計らって、今度は俺が樹葉の口を手で塞いだ。

　恨みがましそうに俺を見つめる樹葉に、俺は木藤さんに気づかれない程度に首を横に振る。

　気持ちは分かる。俺も今の言い方はムカついた。が、だからといって感情的になるのは駄目だ。

　ふと見ると、レイと詠も隠そうとはしているものの、木藤さんに向けるその表情からは『イライラ』としたオーラがにじみ出ている。

　木藤さんに対して、お姉様も俺たちと同じことを思ったのだろう。

「……木藤。そんな言い方では、この子たちも納得が――」

「いえ、お姉様。ここははっきり言っておくべきかと」

「…………」

　冷たいその一言は、お姉様をも黙らせる。

　部屋中に、重い空気が漂い始める。

　木藤さんもそれを感じたのだろう。俺たちに見せるその顔は、苦いものだった。

「皆。気持ちは嬉しいんだけど、お姉様たちの言うとおりだ。今の俺が任務に参加しても、足手纏いなだけだと思う」

　だから、俺は取り敢えずそう言っておく。

　樹葉が口を開きかけたが、俺はそれより先に声を出す。

「会談なら結構遅くなるだろう？　夜食か何か作って待っているよ。だから、気にせず頑張ってこい」

「……じゃあ、ごめんロラン。美味しいの、期待してる」

　レイがそう言うと、少しだけ空気が軽くなった気がした。

「おう。任せとけ」

　流石はリーダーだな、と思いながら俺が頷くと、五人はこれからの動きについて確認するために、テーブルを囲んだ。